



経験に裏づけられた医療社会事業の理解書

「メディカルケースワークの手引き (1,2 巻)」

吉田ますみ著 (聖路加病院)

著者吉田ますみ氏によるメディカルケースワークの手引1と2は、著者が序でも述べているように、医療社会事業の普及のために、医師、看護婦、保健婦をはじめ広く世の人々に医療社会事業を理解してもらい、また実際に役立ててもらおうという意図のもとに書かれた本である。本書は、医療社会事業が果たす役割とその必要性を、多くの事例を用いつつ、初めて医療社会事業という言葉をしる者にも、容易に理解できるように書かれている点で、初心者向けの書といえるであろう。

吉田氏みづからが、30数年間の経験のうちに扱った数多くのケースの中から本書に紹介された事例は興味深く、また従来の医師と看護婦のみによる疾病治療の医療から、患者を全人格的に、心理社会的に把握し、社会的人間という焦点にあわせ治療するのが現代の医療の方向であること、そしてそれが患者の疾病回復にいかにか大切であるか、そのために医療社会事業家(ケースワーカー)の医療チームへの参加がいかに必要であるか

を説いている。ケースワーカーが扱う問題は、患者の治療、訓練意欲の問題、経済的、家庭的、心理的、社会的問題である。もし患者に上述のような問題があると、患者は治療に専念できず、不安定な情緒を生み出し、不適応をしばしば起こし、治療者側からは、治療しにくい患者として取扱われるようになる。このような場合に、ケースワーカーは、他の医療チームメンバー(医師、看護婦、作業療法士、理学療法士、言語療法士、保健婦、等々)から依頼(refer)されてきた患者に会い、治療および、家庭・社会復帰を妨げている諸問題が何であるかをつきとめ、患者と共にその問題解決に取り組んで全人格的に患者を励まし、援助するのである。それゆえ患者が上述のような諸問題を持っていたり、不適応を起こした時にはケースワーカーをただちに起用するのが望ましいわけである。この点につき、著者は医療チームの中で、各専門家がその専門性を発揮するためにチームワークの必要性にふれている。また医療社会事業

が、患者の社会復帰を可能せしめるために医療機関のみならず、地域社会とつながりを持ち、社会資源を活発に駆使し、患者の福祉に貢献しようとしている努力がうかがえる。

しかしながら全体としては、読者に医療社会事業につき概論的理解は与えるが深みに欠ける点が惜しまれる。なおまた、第2巻の<歴史を中心として>では、前半の初心者向けの内容と比して、後半の日本の医療社会事業の歴史で、医療社会事業講習会のカリキュラム資料などが子細に紹介されるなどアンバランスに思われるところがある。

最後に、医療社会事業の開拓者の人であられる氏の歴史はそのまま日本の医療社会事業の歴史でもあるのだが、著書では、客観性と主観性が交差し現在の一般的な日本の医療社会事業の状況、動向などが、本書からうかがえないのは残念である。

森山 玲子

(東大病院リハビリテーションセンター SW)